

いよいよコロナ明け ～若手を元気に～

長谷川 修司

東京大学大学院理学系研究科物理学専攻
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

コロナ禍がやっと終息の方向に向かいつつあるようです。学術講演会や研究会の対面開催など様々な活動が以前の形に戻りつつあるのはうれしい限りです。国際会議や共同研究のための海外渡航も復活し始めているようです。その反面、さまざまな事務的・運営面の会議、あるいは全国から視聴者を集めるオンライン講演会などは、むしろオンライン形式が定着し、アフターコロナでも活用され続けることでしょう。対面が重要な会合とオンラインミーティングで済ませる会合をうまく使い分けて、学会だけでなく大学や会社などでもさまざまな形態でのミーティングが展開されている現状を見ると、まさにアフターコロナの新しい日常が出来上がりつつあるのを感じます。

しかし、ここ3年近いコロナ禍で深刻な影響を受けたのは、実は若手研究者や学生たちです。一度も対面で学会発表をすることなく、パソコンの画面に向かって「講演」して卒業していった学部生や修士学生が多いことと思います。彼らは、コロナ前なら横のつながりで情報を得ていた就活においても、オンラインセミナー等を活用して必死で情報を集めて就職していきました。私は、所属する学科・専攻の就職指導担当を長年続けていますが、毎年、12月ごろに開く就職ガイダンスでは、内定をもらった学生たちと1学年下の就活を始めようとする学生たちとの懇談会をオンラインでやっているのですが、ロ々に友達との情報交換の機会が少なくて困ったと言っていました。学会がオンラインの時には「アフターファイブ」での学生どうしの情報交換の機会も失われていました。コロナ禍による若手の孤立化は、実はシニアな研究者・教員が想像しているよりもはるかに深刻だったようです。研究面でも所属研究室の外のグループとの交流が激減したところも多かったのではないのでしょうか。

応用物理学会には、若手チャプター¹やスチューデントチャプター²という仕組みがあり、若手や学生会員が自主的に研究発表会や勉強会、交流会などを開催

する活動を支援しています。地域ごと、所属機関ごと、あるいは専門分野ごとにグループを作って活動をしているようですが、コロナ禍によって活動が停滞したところもあるようです。

そこで分科会幹事に提案ですが、薄膜・表面物理分科会がカバーする分野で、若手・スチューデントチャプターを作って、若手の自主的な活動を奨励し、そのために学会本体だけでなく分科会からも少し金銭的な援助をしてはどうでしょうか。若手こそが、次の時代を担う大切な人材です。この分野を背負う若手を増やし育てることが、「コロナ明け」の今こそやるべきことでしょう。若手が自主的に選んだテーマでの勉強会やキャリア情報交換会など、「おとな」が少し水を向けてやれば、若手は活動的なのですぐに動き出すはずです。

大学入試では、ここ数年、理工系志望者が増加しているようで、また、昨秋、政府が理工系学部進学者を大幅に増やすという目標を掲げたとの報道もあり、今はある意味追い風が吹きつつあります。若手・学生会員が楽しく有意義に研究活動する環境・仕組みを分科会として準備することが重要と思います。

- 1) <https://www.jsap.or.jp/young-researcher-chapters>
- 2) <https://www.jsap.or.jp/student-chapters>



長谷川 修司 (Shuji Hasegawa)

1985年 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了。同年 ㈱日立製作所入社。1990年 東京大学助教, 1995年 同助(准)教授, 2010年 同教授。
物質表面での電荷・スピン・物質輸送に関する研究に従事。博士(理学)。

Preface for "After COVID-19 ~Encouraging young people~". Shuji Hasegawa, Professor, Department of Physics, University of Tokyo (3-7-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan). E-mail: shuji@surface.phys.s.u-tokyo.ac.jp